

猿聳入（さるむこいり）

昔々、お爺さんが広い畑を一人で耕しよったんと。汗を流して必死で鋤を打つがなかなかはかどらん。あんまりやねこいもんじゃけえ、「猿でも犬でも何でもええけえ、誰か手子（てご）うしてくれんかいのう。もし畑を耕してくれりゃあ、家（うち）に三人の娘がおるが、どれでも好きなのうやるがのう」と思わず独り言を言うたんじゃと。

それからもしばらく畑を耕していたが、とうとう精魂尽き果てて木の下で休んでいるうちに、いつの間にかうとうと眠ってしもうた。

やがて目を覚ましたお爺さんは、目の前の光景を見てたまげた。居眠りしているうちに、なんと、あの広い畑が全部きれいに耕されとったんじゃ。

「わあっー、こりゃあどうしたことじゃあ。いったい、だれが耕してくれたんかいのう？」と首をかしげていると、突然、目の前に毛むくじやらの大猿が一匹飛び出てきて

「わしが耕したんよ。お爺さん、あんたあさっき、もし畑を耕してくれたら三人おる娘のどれでも嫁にや

る言うたじゃろう。あの話は嘘じゃないよのう。約束は守ってもらうよ。もし約束通り娘さんを嫁にくれるんなら、娘さんは生涯大切にする。しかし、もし約束が守れんのなら、秋に仲間をたくさん引き連れて、畑の野菜を全部頂戴することになるが、それでもええかのう？」と言う。

お爺さんは、真っ青になり、（やれしもうた。あがあなことを言わにやあえかった。）と後悔したが、もう遅い。

「分かった、分かった。約束は守るよ。明日の晩、娘を迎えに来てくれえ」

というて、逃げるようにしてその場を離れたそうな。

家に帰ってから、「困ったことになったのう。あがあな大猿に大切な娘をやりとうはないが…しかし、約束は約束



じゃし…秋に農作物を盗られるのも困る。いったいどがあすりゃあええんかのう」と言いながら、まず一番上の娘を呼んで「あんたあすまんが猿の嫁さんになってくれんかのう」言うたら、娘はぷんぷんに怒って「とんでもない。猿の嫁なんか死んでも嫌じゃ」と取り付く島もない。



二番目の娘を呼んで同じように頼んだら、二番目の娘も「猿の嫁なんか絶対に嫌じゃ」と、これまた話にならない。困ったのうと三番目の娘を呼んで事情を話をした。しばらく考えていた末娘は、「それはお父さん、さぞかしお困りでしょう。分かりました。私が猿の嫁

に行きましょう」と言う。

「おお、そうか。行ってくれるんか。すまんのう」

「ただし、お父さん。その代わりに願いを聞いてください」

「ああ、猿の嫁に行ってくれるんなら何でも言うことを聞いちゃる。何か欲しいものでもあるんか？」

「はい。母の形見の鏡と大きな壺をください」

「形見の鏡と大きな壺？そんなものならお安い御用じゃが、いったい、なしてそがぁなものが要るんじゃ？」

「まあ、万事私にまかせてつかあさい」と、末娘は何かを決意したかのように静かにうなずいた。



さてその翌晩のことじゃ。猿は約束通りに「じいさん、娘さんをもらいに来たよ」とやってきた。そこへ末娘が出てきて、「婿殿。私があなた様のお嫁になります。これから、あなたの山に一緒に行きましょう。ただし、お願いがあります。これは私の母の形見の、大切な鏡です。それと、これは我が家に古くから伝わる大壺です。この鏡と大壺を花嫁道具として持参したいのですが、よろしいでしょうか」と言うたげな。

「花嫁道具まで持参してくれるとは、有難いことじゃ」

「鏡はとても大切なものですから、私が懐に入れて持参しますが、大壺の方は重いので、す

みませんが、婿殿、これを背負ってくだされ」
「たやすいことじゃ。背中に背負って行こう」
「万が一、落ちて壊れたりしたら大変ですから、縄で体にしっかり結わえてくれませんか」
猿はその願いも聞き入れて、背中に大壺を背負い、さらにそれを荒縄で自分の体にしっかりと結びつけた。そうして娘と猿は連れだつて出発した。
しばらく行くと大川があつて、橋が架かっている。娘と猿が橋の中ほどまで来た時のことじゃ。何を思ったか、娘は猿に気付かれないように、そつと懐から大切な母の形見の鏡を取り出すと、大川の



深いところめがけてポチャンと投げ捨てた。そして「ワーツ」と突然、大声で泣き始めた。

「いったい、どうしたんじゃ？」とサルがびっくりして聞くと、

「大切な母の形見の鏡を大川の中に落としてしまいました。いったい、

どうしらいいでしょう？」とワーツワーツ泣く。

「鏡なんかどうでもええじゃないか。もっとええのを買(こ)うちやる」

「いえ。あれは母から頂いた大切な、大切な鏡です。あれがなければ、とても生きてはいけません。私は今、ここで川の中に身を投げて死にます」と、今にも川に飛び込みそうな勢いだ。せつかくの花嫁に死なれたら元も子もない。

「仕方ないのう。ここで待っどけ。今から川の中に入って鏡を見つけちやる」と言うと、猿は背中に大壺をしぼりつけたまま川の中にザンプと入っていった。



「どこらへんに落としたんじゃ？」

「もう少し遠くです」

「ここらあたりか？」

「いえ、もっと深い方です」

と娘は、川の深い方へ深い方へと巧みに猿を誘導する。猿は、娘の言うとおりにどんどん深い方へ行き、体をしゃがめて鏡を探している。

そのうちに、背中に背負っている大壺の中に少しずつ水が入ってきたが、必死に探している猿は気がつかない。やがて、ようやく鏡を見つけ、しめたと手で取ろうとあっさり体を低くした瞬間、どつと大壺の中に水が入ってきた。とたんに、猿の足は川底からフワリと浮いて流され始めた。猿はあわてて壺を外そうとしたが、体にしっかりとくくりつけてあるので外すことができない。

「た、助けてくれえー」大声をあげながら猿は、下流へ勢いよく流される。猿は、浮かんだり沈んだりを繰り返していたが、やがて大川に沈んだまま二度と浮かび上がることはなかった。



それを見届けてから娘は、「お母さん、ありがとう。お猿さん、ごめんなさいね。」と、両手を合わせると、くるりと向きを変えて家へ帰っていったそうなの。

けっちりこ。

